The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国哲学史研究ノート〔七〕
Author(s)	加地, 伸行
Citation	中国研究集刊. 1992, 11, p. 67-70
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60779
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国哲学史研究ノート（七）

加地伸行

或る友人から教えてもらって、次のような文章が出ていたことを知った。『本の雑誌』（一九九一年十一月号・本の雑誌社）という書評中心の一風変った雑誌の「ナナメ読み決定版」という一ページのコラム中であり、当該号のタイトルは「大学の機関誌・広報紙における名文発見の愉しみ」である。執筆者は武藤康史氏。私とは面識はない。

大阪大学文学部中国哲学研究室編輯（と表紙にある）『中国研究集刊』に連載されている加地伸行「中国哲学史研究ノート」は一種の文章読本だ。加地伸行には多くの著書があって文章のうまさに舌を捲くが、その手だれの文章家の秘伝の公開なのである。（後略）

本誌は、中国哲学・文学・語学等の専門研究者を読者とする学術専門誌であるので、他の分野の読者がいたとは、驚きであった。なにしろ、中国関係の論考は、専門研究者でも読みづらいものであるから、信じがたかった。

もちろん、私の文章への過褒に対して面映ゆい気持が真先にあり、このノートに紹介すべきかどうか、ずいぶんと迷ったのだが、結局、このように紹介することにした。

その最大の理由は、文章を印刷することの社会性とその責任とのためである。そのようなことは言わずもがなのことなのではあるが、この思いがけない読者の存在を知り、痛感したのであえて引用した。

このノートは、「その一」において述べたように、若い中国学研究者のために書くことを目的としているが、その使命を一層強く感じている。と言うのは、最近、『日本中国学会報』の編輯・審査において感じるところがあったからである。

日本中国学会は、日本で最も大きい中国研究者の学会であるが、会員の選出による学術専門委員に『日本中国学会報』への投稿論文の審査ならびに編輯を委託している。投稿論文の各篇について二人の委員が別個に査読し、哲学と文学・語学との二

つに分れた分科会において論評して候補者をきめ、その後、委員会全体で採否を決定する方式である。

さて、私は哲学の分科会において今年まで九年間にわたって担当してきたが、とりわけ今年、非常な不満を覚えた。その理由は以下のごとくである。

投稿論文（規定枚数超過分は除く）の内、約二割は、問題なく通過したもの、あるいは若干の補訂を行なうことを要請する優秀な論文（A）である。一方、同じく約二割がいろいろな理由で不合格の論文（C）である。さて、残りの六割は何かと言うと、やはり不合格なのである。しかし、査読委員の意見によって、修正して可という評価を与えている。そこで、査読委員が問題点や希望など参考意見を附して返却し、約一個月半ぐらいの期間を置いて再提出することとなっている。これを論文Bと称する。

問題はこの修正するB論文である。ほとんどが三十代、二十代の研究者の論文であるが、修正して再提出した論文を査読委員がもう一度読むということはほとんどない。だから、刊行されるまで、修正が十分であるのかどうか、分らないのである。

その結果、刊行後に読み直してみると修正が十分でなく、やはり不合格とすべきものが登載されてしまっているということになっている。

これは、専門委員の責任である。私は現在その一員として、慚愧にたえない。

この不合理を改善するには、修正論文に対して修正の確認を行なわねばならないが、専門委員は果してそこまでしなければならないのか、いや、そういう権限を与えられているのか、というと、はなはだ漠然としている。「審査」の概念がはっきりしないからである。

結局、最善の方法は、B論文・C論文は不合格とし、A論文のみを登載することである。それなら問題はない。ところが、仄聞するところでは、学会報の刊行に文部省の助成金が出ており、相当量の原稿が必要であるという。

それはおかしい。それに、いくら助成金を受けているかというと、五、六十万円である。たかが五、六十万円で機関誌の水準を下げるくらいなら、そのような涙金は拒否すべきである。会員は千七、八百人いるのであるから、頭割りにすれば一人当り三百円ではないか。年会費を三百円増額すればすむことである。

この話、学会の制度上の問題であるから、本誌の、しかもこの欄でこれ以上言っても始まらない。私は私なりにしかるべき場所で私の意見を主張しよう。

問題は、制度上の問題とは別に、論文自身の点にある。すなわち、六割のB論文、二割のC論文、計八割の投稿論文について言えば、投稿前、論文としてもっと練りあげるべきである。

具体的に言えば、指導者や親しい研究者に十分な指導を受けるべきである。今日、研究者が量産された結果、研究者が本当

に自立できているとは言えない。未熟な研究者が多い。そのような人が投稿してくれれば、不合格なのは当然である。その上、本来は不合格であるのに、専門委員の意見を十分に咀嚼しきれないまま形ばかり修正して学会報に登載されたばかりに、経験に磨きがかからず、その後、一向に進歩しないで終っている。

何度も何度も修正し、指導者たちの意見と往復するなかで、論文執筆や研究のコツというものが覚えられるのである。そういう訓練を経ないで、たとえ学会報に登載されても、当人にとって実質的にはプラスになっていない。事実、その後、研究者として成長していない人が多い。

一方、学会報以外の発表機関に登載されている新進の論文にすばらしいものがある。おそらく、丹念に練りあげたからであろう。私は、現在、『日本中国学会報』登載論文の水準に疑問を抱いている。学会報に登載された論文（ほぼ中堅の会員）から選考して与える学会賞の哲学部門が「受賞該当者なし」とすることが多いのは当然である。

いい論文が少ない根本理由は何か。それはさまざまであろう。しかし、それらをいま一つ一つ追いかける余裕はない。ただ一つ言えることは、必然性なき論文を書くからであろう。それを書かねばならない必然性の意識が稀薄なため、書いている内容がこちらの胸に迫ってこないのである。てっとり早く言えば、知的興奮を与えないのである。たとえ自分の知らない領域の論文であっても知的興奮を与えるものは、おそらく本物であろう。

私は、学会報投稿論文をこれまで十七篇（毎年、一、二篇）査読してきたが、B論文一篇を除き、あとすべてC論文の評価を行なった。もちろん、ここをこう直せばいいのに、といったことを思うことがある。しかし、C論文をB論文に水増しして執筆者に意見を附す気持になれない。なぜなら、そうして修正した結果を刊行前に見ないままに終わるのは、私としては落ちつかないからである。ありていに言えば、責任が持てないからである。

今日では、完全な独学者はいない。ほとんど必ず指導者がいる。あるいは、いたはずである。その指導者に謙虚に指導を受けるのが最も自然であり、最も早道である。それに加えて、たとえば、このノートのようなものを参考とすべきであろう。

私の個人的意見では、『日本中国学会報』は論文を登載する必要はないと思っている。むしろ、諸情報を精細に盛るべきである。各国や各分野における研究上の動態や、研究会の報告記、国内外の図書情報等、研究者が共通して知りたいことをもっと盛るべきである。論文を載せるのは、その研究者が関係する諸雑誌上で十分である。学会賞は、全国の発表物を対象とすればすむことである。

かつては、印刷事情が悪かったことや、発表誌が少なかったため、学会報が貴重な発表場所であっただろう。しかし、時代は変ったのである。現在の学会報の任務は、論文発表の場というよりも、研究上の有意義な情報の提供である。たとえば早い

話が、若い研究者は、文部省の科学研究費助成金とは何かということの初歩的理解すらできていないのである。基本的情報すら知らないのである。学会は、学会だからこそ伝えうるような情報を提供する、そういうサービスをもっとすべきであろう、つまらない論文を多く載せるよりも。